

文學博士小倉進平君著「郷歌及び吏讀の研究」に對する

授賞審査要旨

小倉進平君の著「郷歌及び吏讀の研究」は、朝鮮の言語竝に文字の歴史的研究に關する重要な論文にして、ひとり古代朝鮮における言語資料を開發したるにとどまらず、延いては朝鮮語の史的研究の根柢を作り、以て東亞諸民族語の比較研究に對して多大の貢獻をなせるものなり。即ち著者は朝鮮語が一方に大陸諸民族の言語といかに相關聯し、他方に我が國語といかに背馳する所あるかといふ點につきて、確實なる基礎的事實を斯學界に供したるものなり。

今之を細説するに、本書は一冊(五九八頁)三編より成る。第一編は、從來難解なりし新羅の郷歌二十五首を讀破註解して、新羅の古語及び語法を明かにしたるものにして、著者は之によりて個々の單語のほか幾多のまとまりたる章句を探究して、貧弱なりし朝鮮の古語資料に緊要なる新要素を供給したり。第二編は、朝鮮の萬葉假名といふべき吏讀文字の名稱意義由來及び沿革を詳説せるものにして、古今の吏讀を擧ぐるに四百二十八に及べり。本編に在りて著者は、一々文獻上の明徴と典據の漢字とを列擧しつゝ、細かに各個の吏讀の音義を考證せるに止まらず、更に進みて吏讀によりて語法の説明を試みて、第一編における郷歌解釋の成果をこゝに利用せり。第三編は朝鮮語の音韻竝に語法

に關する現象中、格段重大なる意義を有するものを攷究せり。殊に母音調和と語頭音法とを説ける二章は、朝鮮語がいはゆるウラルアルタイ語系と共通なる音韻法を有する點を闡明し、近年一問題とされる日鮮兩語の本質異同論竝に系統異同論に對して、新に重大なる示唆をなすものなり。但し郷歌の註解にありては、佛典に資材せる歌謠の解釋未だ十分ならざるもの散見し、又歌謠の形式を論じたる點につきても、其の觀察の方法を悉くさざりし所あり。從ひて郷歌の解釋と韻律とに關する著者の所説に對して、異論を容らるゝ餘地なしとせず。且つウラルアルタイ語系の音韻法そのものに就きて檢討猶未だ足らざりしを遺憾とすべし。

然りと雖も、以上二三の缺點は要するに微瑕に過ぎずして、著者が、從來一二の學者が解釋の端緒を開きしに止まれる新羅郷歌及吏讀の研究を大に進め、以て朝鮮語法史上の基礎を作りたる苦心と、之によりて東方比較言語學上に有用なる素材を提供したる業績とは學界に多大の裨益を與ふるものとなさざるべからず。かゝる苦心を閲みし、かゝる業績を擧ぐるに當りて、著者が普く朝鮮に於ける新古文獻を涉獵し、廣く半島各地の方言を踏査して、精到なる専門言語學上の能力を發揮し亦該博なる文献學上の蘊蓄を傾注したることは、固より多説を要せざる所なり。